

偉大なる魔法使いと戦姫

フリーク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新世界での冒険から数年後…ネギの元に再び超が現れ、とある協力を求めてやってくる… 更新速度はかなり遅いです

目次

第1話	1
第2話	5

第1話

「ふく、やっと終わった〜」

部屋の主が痙攣した背筋の筋肉を伸ばすように、背伸びをした。

彼の名はネギ・スプリングフィールド

数年前に起こった事件を解決に導いた白き翼アラアルバのリーダーであり、
プロジェクトブルーマーズ
「Blue Mars計画」を考えた第一人者だ。

今ではその計画も軌道に乗り、以前に比べてだいぶ穏やかな毎日を
過ごせている。

ーこんな日がずっと続けばな

そんな事を考えてしまいがちだが…

「ちよつと入るネ、ネギ坊主!」

こつこつという時は必ず騒動がやってくるものだ。

「どうしたんですか? 超チャオさん」

「これを見るネ!」

差し出されたのは、懐中時計に似たものだった

「これって…航時機タイムマシン『カシオペア』ですか? でも少し違うし、どつちか
というと渡界機に似てますよね?」

「そうネ、これは並行世界じゃなくテ、異世界イセカイに行くネ」

「へ〜そうなんですか?…つて、本当ですか!?!」

さらつとスゴいことを言われた為慌てて聞き直す

「そうネ。一度使ってみたケド、転移場所の環境の文化レベルが違いすぎたから、そう判断したネ」

思わず啞然とした

「自分で使ったんですか…?」

「あたりまえネ、それで相談があるネ」

「え…。それってまさか」

「この異世界に行つて、調査してきて欲しいネ」

「やっぱりですか!」

何となくの嫌な予感が当たつた…そんな事をネギは考えた…

「それでどうするネ、ネギ坊主?」

「わかりましたよ、超さん」

「ありがとネ、それじゃあコレ、ハイ」

超がネギに何かを投げた

「これって…僕の魔法発動媒体の指輪?」

「そうネ、それに加えて何でも入れられる収納機能も搭載してるネ」

「それはすごいですね、それじゃあ何か必要なものを色々入れてきます!」

◆◆◆

「ほんと、何でも入りますねコレ…」

戻つてきてそうそうネギは言った

「アスナ達には言つてきたネ?」

「はい、一応」

「それじゃあ行つてらっしゃい」

渡界機を作動させ、少年は、部屋から消えた…

◆◆◆

気づくと僕は草原の上に立っていた

眼下には街があり、その近くには多少質素とも言えるが、城とも言える大きな建物があった。

「さて、城下町で聞き込みする前に…」

僕は超さんから貰つた指輪からのどかさんに貰つた、

コンフティーナ・ダエモニア、アウルリス・レキタンズ
魔神の童謡と、読み上げ耳を身に着け、相手の考える事を分かるようにして城下町へと向かった。

◆◆◆
城下町に住んでいる住人の話を繋げていくと、ここはレグニーツア公国という国で、ジスタートの七戦姫に一人、アレクサンドラIIアルシャーヴィンが治めているのだという。

ジスタートの七戦姫というには、昔、30ほどの小部族がこの地の覇権を競う中、「黒竜の化身」を称する男が突如として現れ、我を王として従えば勝利を約束するとした彼に七つの部族が従った。

そして彼は服従の証として、各部族から捧げられた女性に竜具を与えて七戦姫とし、宣言通りに周辺部族を平定しただけでなく、周辺諸国をも滅ぼしてジスタート王国を建国し、その初代国王となった…だそう

今でも小競り合いはある様だが大きな戦争はあまり起こっていないようだ。

やっぱり平和が良いな…って考えていると、不穏な声が聞こえてきた。

(…ガキどもは沢山捕まえた…あとはコイツラを売れば…)

声が聞こえてきた方向を見ると、いかにもガラの悪そうな男達がいるた。

するとその中の一人と目が合い、奴らは走って逃げてった。

「おい、待てッ！」

◆◆◆

僕は少し気晴らしに外を見ていた。

いつもどうりの城下町

だけど今日は何故か、変な感じがする

僕の竜具ヴァイラルトのバルグレンも何か騒いでる

その違和感を確かめるように城下町を見つめると騒がしい所が合った

そこでは複数の男性を一人の男性が追いかけていた。

「君が気になっていたのは、彼らかい？」

竜具を撫でながら聞いてみると肯定を示すように双剣の炎が揺ら
いだ。

よし、ちよつと調べてみようかな…

僕が寝ていたベットに仕掛けをして、王宮を抜け出した。

◆◆◆

僕が町に着くと彼らはまだ追いかけてるのを見ていた

周りの人も何かの催し物だと思ってるのか、ヤジをとばしていた
すると追いかけていた方の彼が立ち止まった

諦めたのかと思つたら何かを唱え始めた

「ラ・ステル マ・スキル マギステル 風 精 召 喚
エウオカーテイオ・ウアルキユリアール
コントウベルナリア・グラディアーリア アゲ・カピアント

剣を執る戦友 !! 捕まえて」

すると彼の周りに分身が現れた

これには僕も含め、みんな驚いていた

しかし、そんな事を気にせんとばかりに、彼らは逃げてった男達を

捕まえていた

その手際の良さに僕は凄く驚かされた

そして彼はその内の一人に何か質問していた

「我 アナタのオナマエ ナンデスカ 汝の 真名を問う」

指を指しながら聞くと

「なるほど わかりました。ガレスさん、誘拐した子供たちはどこに
いますか？」

その質問に僕らは驚いた

何故彼はそんな事を知っているのかと…

そんな事を考えていると、

「すみません、あとで誰か衛兵に伝えてください。『郊外の南の森35
00アルシンの所に子供がいる』と」

そう言い残すと、彼はその場から飛び屋根の上を走ってった…

彼は一体何者なんだろう…

疑問にある中、心の奥底に眠っていた筈の気持ち動き出した事に
まだ僕は気づいていなかった…

第2話

―その後僕は郊外の森を飛んでいた
ここから3500アルシンの所にいると、言っていたがその1アル
シンが何メートルかが解らないのがな：

一応地図を考えてもらったから大丈夫だと思うけど：
それにしても、あの場で魔法使ったのはダメだったかな…？

多分必要以上に注目を集めてしまったし、どこからか変な視線を感じたし：

何も起こらなければ良いんだけど：

◆◆◆

しばらくすると、小さな小屋が見えてきた

周りには、三人程の見張りがいるみたい

中には、攫われた人と盗賊がいた

さて、早めに終わらせるか

◆◆◆

三人称Side

小屋の中では、恐怖が渦巻いていた

盗賊の表情からは、ゲスな顔が浮かんでいた

誰もが目を瞑り恐怖に耐えていた

バタツ：

外から何かが倒れた音がした

盗賊達は怪訝そうに外を見に行った

しばらくすると、悲鳴や、怒号が聞こえたが直ぐに止んだ

扉がゆっくりと、開く

開けた所から、陽が入り中が照らされた

「キミ達、大丈夫？」

そんな声をかけてきた男の人が居たが、逆光のせいで顔がよくわからなかった

…でもその人は優しそうな表情をしていた

そんな事を兵士の人達が来るまで考えていた：

◆◆◆

ネギSide

ふう〜、危なかった…

助けたのは良いけど、直ぐに兵士が来たから慌てて逃げてたからなあ…

多分あの子達には顔見られたし、直ぐにバレるだろうだしな…

…しようがない、アレを使うか…

大方バレる可能性は低いし、少なくともさつきから感じる視線を誤魔化す事はできるだろう

よし、路地に入ったら使おう！

そして、路地に入ったら僕の手元には、瓶詰めのアメがあった

◆◆◆

???Side

あれ〜おかしいな…

さつき彼が戻ってきたから後をつけてた筈なんだけど…

路地の所で見失ったみたいだ

う〜ん、どうしよう…

そんな事を考えていると、僕が見つめる先に丸い小さな玉のような物があった

近づき確かめると飴玉だった

手で持ち光に透かすように見ている

しかし、アメに気を取られつい躓いてしまい、手にあったアメはキレイに放物線を描き僕の口に、入ってしまい反射で飲み込んでしまった…

「どうしよう…」

多分害は無いだろうけど僕の身体のこともあるからな…

一度城に戻ろう

そう結論づけ、路地を出ようとする足に何か引つかかっていた
そこでやっと気付いた

いつの間にか僕の身体は小さくなっていた

視線は低くなり身に着けていた服も、ブカブカになっていた
「なっ、ナニコレー!」
小さいながらも大きな声が出ってしまった